

# 2020～2022年に渥美半島の太平洋沿岸へ漂着した ハシボソミズナギドリについて

藤岡エリ子<sup>1)</sup>・藤岡純治<sup>1)</sup>

Records of the Short-tailed shearwater *Puffinus tenuirostris* (Temminck, 1836) drifted ashore of the coast facing Pacific Ocean of the Atsumi Peninsula, Aichi Prefecture, from 2020 to 2022

Eriko Fujioka<sup>1)</sup> and Junji Fujioka<sup>1)</sup>

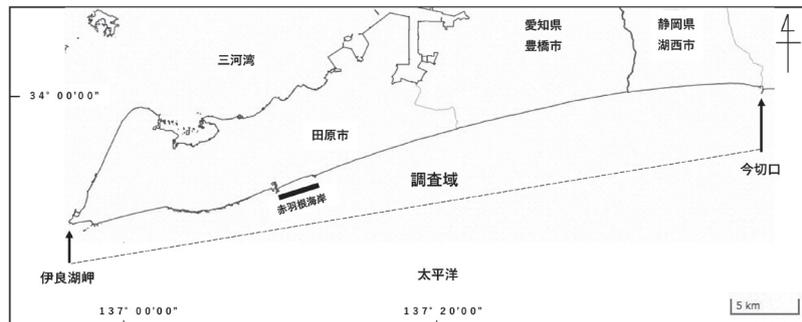
## はじめに

晩春から初夏にかけて、ミズナギドリ類が日本各地の太平洋沿岸に漂着する現象が古くから知られている(川口・丸茂, 1964; 黒田ほか, 2009)。漂着するミズナギドリ類の大半を占めるのは、タスマニアを中心とした南オーストラリアで繁殖し、非繁殖期は北上してカムチャッカやアリューシャン列島にいたる渡り鳥ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* (Temminck, 1836) の生後半年の幼鳥である(丸山ほか, 1986; Oka and Maruyama, 1986)。

ハシボソミズナギドリは時として大量漂着することが知られており(杉森ほか, 1976; 田口・加藤, 1997; 久保田, 2006 など)、渥美半島の太平洋沿岸に

おいても、過去に何度かの大量漂着が確認されている(東三河野鳥同好会, 1979; 真野・緒方, 2010, 2013, 2016; 真野ほか, 2019)。これらハシボソミズナギドリの大量漂着に関する報告がある一方、同一地域でのハシボソミズナギドリの漂着数を長期に渡って調査している事例は、西三河野鳥の会の真野 徹氏が中心となり2009年から実施されてきた渥美半島の太平洋沿岸で行われているものが唯一である(真野, 2009; 真野・緒方, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016; 真野ほか, 2019)。

この真野氏らが実施してきた渥美半島の太平洋沿岸におけるハシボソミズナギドリの漂着数調査を、2020年から筆者ら東三河野鳥同好会員が引き継いで実施することとなった。本稿では、2020年から2022年にか



第1図. 調査域. 電子国土 web 白地図を加工して作成.

1) 東三河野鳥同好会. Higashimikawa Wild Bird Club. 5-4-6, Imureminami, Toyohashi, Aichi 440-0835, Japan.

Corresponding author: Eriko Fujioka. eriko@tcp-ip.or.jp

原稿受付 2023年1月5日. Manuscript received Jan. 5, 2023.

原稿受理 2023年1月24日. Manuscript accepted Jan. 24, 2023.

キーワード: 渥美半島, 漂着鳥, ハシボソミズナギドリ, モニタリング調査.

Key words: Atsumi Peninsula, drifting bird, Short-tailed shearwater, *Puffinus tenuirostris* (Temminck, 1836), monitoring survey.

第1表. 2020年から2022年の調査時に確認された漂着鳥の種類とその個体数.

		確認個体数/number of individuals		
		年/year	2020	2021
<b>ミズナギドリ科 Procellariidae</b>				
フルマカモメ	<i>Fulmarus glacialis</i> (Linnaeus, 1761)		1	
オオミズナギドリ	<i>Calonectris leucomelas</i> (Temminck, 1836)		3	2
ハイロミズナギドリ	<i>Puffinus griseus</i> (Gmelin, 1789)			6
ハシボソミズナギドリ	<i>Puffinus tenuirostris</i> (Temminck, 1836)		131	59
ミズナギドリ属	<i>Puffinus</i> spp.			2
<b>その他の科 others</b>				
カンムリカイツブリ	<i>Podiceps cristatus</i> (Linnaeus, 1758)			2
ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i> Pallas, 1811			1
チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus</i> (Linnaeus, 1758)			1
ウ属	<i>Phalacrocorax</i> spp.		4	8
アオサギ属の一種	<i>Ardea</i> sp.		1	
カラス属	<i>Corvus</i> spp.		2	1
不明種	unidentified			1
	合計/total		142	78
				177

けて実施したその調査結果を報告する.

## 調査域と調査方法

### (1) 調査域

調査域は、静岡県湖西市新居町今切口から愛知県田原市伊良湖町伊良湖岬にかけての太平洋側沿岸約 55 km である (第1図).

### (2) 調査方法

各年ともにミズナギドリ類が観察されるようになる5月下旬に田原市赤羽根町の赤羽根海岸にて事前調査を1回実施した後、今切口から伊良湖岬にかけての本調査を2020年は6月4日から6日にかけての3日間、2021年は6月9日から12日までの4日間、2022年は6月8日から11日にかけての4日間で実施した.

調査では、見落としのないように複数人で汀線から潮上帯に広がって海岸を踏査し、確認された全ての漂着鳥の種類と数を記録した. また、漂着鳥が斃死体の場合、ハシボソミズナギドリの斃死状態を“新鮮”、“やや古い”、“腐敗”、“白骨・乾燥”の4段階に区分した. 確認した個体の位置情報は、真野らの調査(真野ほか, 2019など)で使用されたガーミン社製のGPSで記録した. 一部はスマートフォン搭載のカメラアプリ(Free Camera v4.7)で斃死体の画像に経度と緯度を写し込んで撮影し記録した.

本調査は、以下の16名で実施した. 伊藤里美, 稲田浩三, 荻野吉央, 木村真悟, 鈴木みよし, 高橋章子,

林 晴美, 藤岡エリ子, 藤岡純治, 牧野伸一, 真野徹, 山本正樹, 米澤里美, 渡辺美恵子, 渡邊幸久, 渡會理恵 (五十音順).

## 結果

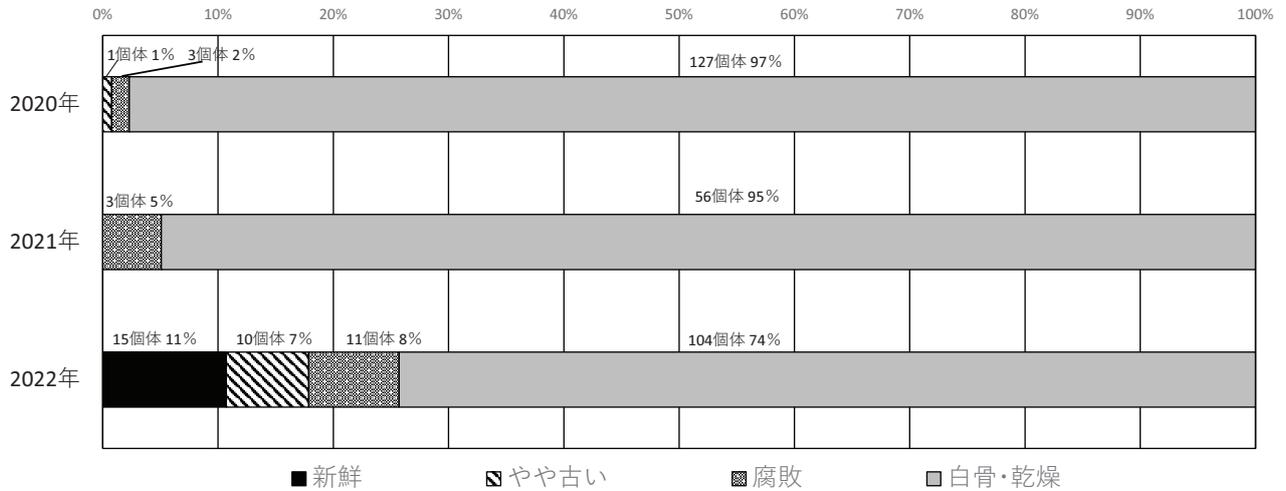
2020年から2022年にかけての本調査で、合計397個体の漂着鳥が確認され(第1表)、全個体が斃死体であった.

### 【2020年】

2020年の調査で確認された漂着鳥は142個体で、そのうちミズナギドリ類はフルマカモメ *Fulmarus glacialis* (Linnaeus, 1761)1個体, オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* (Temminck, 1836)3個体, ハシボソミズナギドリ131個体の合計135個体あった. ミズナギドリ類以外の漂着鳥は7個体で、種レベルまで同定できたものはなかった. ミズナギドリ類の個体数が漂着鳥数全体に占める割合は95%、漂着数が最多のハシボソミズナギドリが漂着鳥数全体に占める割合は92%であった. また、ハシボソミズナギドリの個体数がミズナギドリ類の漂着数に占める割合は97%であった. 漂着したハシボソミズナギドリは全て幼鳥で、それらの斃死体の状態は“やや古い”1個体(1%)、“腐敗”3個体(2%)、“白骨・乾燥”127個体(97%)であった(第2図). 油等で汚染していた個体、釣り針などが死因と推定される個体はなかった.

### 【2021年】

2021年の調査で確認された漂着鳥は78個体で、そ



第2図. 斃死していたハシボソミズナギドリの状態.

のうちミズナギドリ類はオオミズナギドリ 2 個体，ハイロミズナギドリ *Puffinus griseus* (Gmelin, 1789) 6 個体，ハシボソミズナギドリ 59 個体の合計 67 個体であった。ミズナギドリ類以外の漂着鳥は 11 個体で，種レベルまで同定できたのは，カンムリカイツブリ *Podiceps cristatus* (Linnaeus, 1758) 2 個体，ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* Pallas, 1811 が 1 個体であった。

ミズナギドリ類の個体数が漂着鳥数全体に占める割合は 86% で，漂着数が最多のハシボソミズナギドリが漂着鳥数全体に占める割合は 76% であった。また，ハシボソミズナギドリの個体数が漂着ミズナギドリ類数に占める割合は 88% であった。漂着したハシボソミズナギドリは全て幼鳥で，それらの斃死体の状態は“腐敗” 3 個体 (5%)，“白骨・乾燥” 56 個体 (95%) であった (第 2 図)。油等で汚染していた個体，釣り針などが死因と推定される個体はなかった。

【2022 年】

2022 年の調査で確認された漂着鳥は 177 個体で，そのうちミズナギドリ類はオオミズナギドリ 2 個体，ハイロミズナギドリ 27 個体，ハシボソミズナギドリ 140 個体，同定不能のミズナギドリ類 2 個体の合計 171 個体であった。ミズナギドリ類以外の漂着鳥は 6 個体で，種レベルまで同定できたのはチュウシヤクシギ *Numenius phaeopus* (Linnaeus, 1758) 1 個体であった。ミズナギドリ類の個体数が漂着鳥数全体に占める割合は 97% で，漂着数が最多のハシボソミズナギドリが漂着鳥数全体に占める割合は 79% であった。また，ハシボソミズナギドリの個体数が漂着ミズナギドリ類数

に占める割合は 82% であった。ハイロミズナギドリの漂着は 27 個体で，漂着鳥数全体に占める割合が 15% であった。2022 年のハイロミズナギドリの割合は，2009 年から 2016 年にかけてと 2019 年から 2022 年の各 6 月の調査期間で最も高い割合であった (真野, 2009; 真野・緒方, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016; 真野ほか, 2019)。漂着したハシボソミズナギドリは，すべて幼鳥で，それらの斃死体の状態は“新鮮” 15 個体 (11%)，“やや古い” 10 個体 (7%)，“腐敗” 11 個体 (8%)，“白骨・乾燥” 104 個体 (74%) であった (第 2 図)。油等で汚染していた個体，釣り針などが死因と推定される個体はなかった。

考 察

2009 年から 2016 年にかけてと 2019 年の各 6 月に真野らにより実施された渥美半島太平洋沿岸での漂着鳥調査において，ハシボソミズナギドリの大量漂着が確認されたのは 2010 年 (2008 個体)，2013 年 (2443 個体)，2016 年 (2010 個体) で，その他の年のハシボソミズナギドリの漂着数は 32 ~ 259 個体である (真野, 2009; 真野・緒方, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016; 真野ほか, 2019)。2020 年から 2022 年にかけてのハシボソミズナギドリの漂着数は，2020 年が 131 個体，2021 年が 59 個体，2022 年が 140 個体で，2010 年，2013 年，2016 年に確認された様な大量漂着は生じていない。

ハシボソミズナギドリは，雛期の成長が不十分な個

体が多い場合、巣立ち雛が長距離の渡り途中に力尽き日本沿岸へ大量漂着することが知られている（岡ほか、1986）。2019年以降にハシボソミズナギドリの大量漂着が確認されないのは、雛期に十分な餌が与えられたために生育が良く、巣立ち雛が長距離の渡りに成功していることが原因かもしれない。

一方、渥美半島周辺では、2017年8月以降、沿岸の海洋環境に影響を与える黒潮の大蛇行が続いており（気象庁・海上保安庁、2022）、この黒潮の大蛇行によりハシボソミズナギドリの飛翔ルートや斃死体の漂着状況が変化したため、渥美半島の太平洋岸で大量漂着が確認されなくなったのかもしれない。

## 謝 辞

本調査の実施と報告の作成にあたり真野 徹氏には、多くの助言、指導をいただいた。豊橋市自然史博物館主任学芸員の安井謙介氏には、本報告の作成にあたり、多大なご協力をいただいた。あかばね塾ウミガメ調査員の福井孝和氏と表浜ネットワークの田中美奈子氏には、漂着鳥斃死体の採集に協力していただいた。大阪市立自然史博物館動物研究室主任学芸員の和田 岳氏、バードリサーチ理事の守屋年史氏、名城大学農学部生物環境科学科教授の新妻靖章氏、千葉県立中央博物館生態学環境研究科主任上席研究員の桑原和之氏、我孫子市鳥の博物館元館長の齊藤安行氏、山階鳥類研究所研究員の富田直樹氏、同研究所ボランティアの今村知子氏の各氏には、日本各地の漂着鳥の状況に関して御教示いただいた。東三河野鳥同好会の渡邊幸久氏と稲田浩三氏には本報告作成にあたり、貴重な助言をいただくとともに、本稿を校正していただいた。以上の方々に、深く感謝申し上げます。

## 引用文献

東三河野鳥同好会, 1979. 渥美半島におけるハシボソミズナギドリの死亡漂着調査結果（昭和48年～昭和52年）. 東三河野鳥同好会, 愛知, 36 p.

川口弘一・丸茂隆三, 1964. 駿河湾におけるハシボソミズナギドリの大量斃死について. 山階鳥類研究所研究報告, **4** (2): 106-113.

気象庁・海上保安庁, 2022. 黒潮大蛇行の継続期間が過去最長に（令和4年5月25日報道発表資料）. [https://www.jma.go.jp/jma/press/2205/25a/20220525\\_kuroshio\\_daidakou.pdf](https://www.jma.go.jp/jma/press/2205/25a/20220525_kuroshio_daidakou.pdf) (2022年11月1日閲覧).

久保田 信, 2006. 和歌山県田辺湾とその周辺域へのハシボソミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着. 漂着物学会誌, **4**: 43-44.

黒田長禮・内田清之助・中村健児・川村智治郎, 2009. 復刻版原色動物大図鑑, I. 北隆館, 東京, 176 p.

真野 徹, 2009. 2009年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **12**: 1-3.

真野 徹・緒方清人, 2010. 2010年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **13**: 1-4.

真野 徹・緒方清人, 2011. 2011年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **14**: 16-22.

真野 徹・緒方清人, 2012. 2012年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **15**: 7-12.

真野 徹・緒方清人, 2013. 2013年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **16**: 1-6.

真野 徹・緒方清人, 2014. 2014年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **17**: 1-6.

真野 徹・緒方清人, 2015. 2015年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **18**: 1-5.

真野 徹・緒方清人, 2016. 2016年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **19**: 1-6.

真野 徹・緒方清人・渡邊幸久・藤岡純治・藤岡エリ子・稲田浩三・牧野伸一・荻野吉央, 2019. 2019年晩春, 渥美半島における漂着鳥の状況. 西三河野鳥の会研究年報, **22**: 15-21.

丸山直樹・岡 奈理子・渡辺良樹・黒田長久・Irynej Skira・河野裕美, 1986. ハシボソミズナギドリの渡り経路の再検討ー太平洋横断調査結果からー. 黒田長久（編）, トヨタ財団助成研究報告書 ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* の大量斃死に関する総合研究, 黒田長久, 千葉, 36-42.

Oka, N. and Maruyama, N., 1986. Mass Mortality of Short-tailed Shearwaters along the Japanese Coast. *Japanese Journal of Ornithology*, **34**(4): 97-104.

岡 奈理子・丸山直樹・治田則男・黒田長久, 1986. ハシボソミズナギドリのヒナの成長パターン. 黒田長久（編）, トヨタ財団助成研究報告書 ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* の大量斃死に関する総合研究, 黒田長久, 千葉, 90-100.

田口公則・加藤千晴, 1997. 1996年の神奈川県下におけるハシボソミズナギドリの大量斃死について. 神奈川自然誌資料, (18): 31-37.

杉森文夫・岡 七利子・岩瀬順子, 1976. アンケートによるミズナギドリ類の斃死に関する報告: 主としてハシボソミズナギドリについて. 山階鳥類研究所研究報告, **8** (1): 113-131.